



# 積む



fukadamap

グレーの雲と、白い光が、天を泳いでいる。  
白い光の道路を歩むかのように、  
私の意識は、天を歩みだしている。

ベットから見える窓の景色は、  
まさに、そんな印象だった。

朦朧とする脳みそは、  
マンゴージュレのように甘い香りがする。  
物事を整理できる状況ではないことは、  
理解している。

寝ている枕が、  
美しいくらい赤に染まっている。  
怪しくて、美しい赤だ。

記憶の迷路を辿っていこうと試みたが、  
どうも上手くいかない。  
昨日の昼過ぎ辺りまでは辿り着けるが、  
それ以降の記憶がない。  
正しくいえば、断片しかない。  
ガラスの割れて、  
破片だらけのような状態だ。  
片付けようとするが、  
頭が動かない。

そして、  
「欠片を集めない方が良い」  
という甘い誘惑がそうさせる。

「起きた？」

と、笑い声にも似た少女の声が聞こえてくる。  
辺りを見ても、少女どころか、  
人の気配がない。  
その様を見ているのか、

私の様子を見て、更に笑う。

「どこにいる？隠れてないで、出てこい。・・・監視カメラかなんかで見ているのか？」

と大きな声をあげる私は、立ち上がろうとした。

だが、

立ち上がれない。

鎖に繋がれているかのよう、

手足の自由を奪われている。

もちろん、

鎖なんかは、手足についていない。

不可解な現象が、

私の心理を追い込めていく。

追いこめられた私は、

動かないのに、強引に立ち上がろうともがく。

「馬鹿だね。どうにもならないことに、必死になって」

「どうにもならないものなんかない。挑戦しなければわからない」

「そうなんだ・・・。私には、理解出来ないけど」

と高らかに笑う。

私は、その笑い声を聞いて、やめた。

必死になって、もがいている様子を笑われる屈辱に

耐えられない。

誰の仕業かわからないが、

面を汚させるわけにはいかない。

「妙な自尊心はあるのね・・・。つまらない男」

「どうしたいんだ。こんなことをして」

「さあ・・・。自分自身でしたことでしょ?! 結論は、アナタが知っているわ」

「訳のわからないことを言うな。自分でした? 愚かな返答すぎて、どう対応したらいいかわからない」

「愚かなことをしたのが、アナタよ。対応するかしないか、アナタ次第」

と言うと、

白い光が、物的に道となって視界に入ってくる。

「しばらくは、かなりの距離があるの。歩いていきたいだろうけど、そこまで運んであげる」

「どこへ？」

「アナタが見たかった景色が見える場所。少しだけ、早送りで見せてあげる」

「俺は・・・死んだのか？」

「馬鹿ね。自分の体温を測ってみたら？」

「手足が動かない」

「そうだったわね。死んでいない。生きている。もちろん、物体としてはね」

「物体としては？」

「質問は、それぐらいにしてね。私も、忙しい身なの」

私の身体が、宙に浮く。

光の道路に、ベルトコンベアーに乗って運ばれるかのように、

天へ運ばれていく。

そして、私は死んだと思った。

聴こえる少女の声は、神の声・・・、天使の声だと。

私は、静かに目を閉じた。

こうなったら、ジタバタしても仕方がない。

諦めて、

ゆっくりと瞼を閉じることを決意した。

目覚しい時計の音が聴こえる。

ベットの上に、まだ寝ている私。

ストライプのパジャマ姿で寝ている私が、

柔らかいベットの上で寝ていた。

時計の針は、AM5:00をさしていた。